

---

# この思い、君に捧ぐ

ことは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この思い、君に捧ぐ

### 【Nコード】

N3620W

### 【作者名】

ことは

### 【あらすじ】

貴方に相応しい人間になったら戻ってきます。そう約束したのが七年前。その約束を果たすべく、私は彼の元に帰ってきた。「不肖キャサリン・リディア」アークワールド、これから精一杯殿下の警護をさせていただきます！……あれ？何こけてるんですか、レイヤード殿下？

フラグクラッシャーの天然ボケ女騎士とヘタレな俺様王子のどたばたラブコメディ。週一更新の予定。

## プロローグ

それは近くて遠い昔の話。けれども、不安で揺れていたあの緑玉の如き双眸を、私は今でも鮮明に思い出すことができる。

「……ずっと、俺の傍にいろ」

何を今更、と思った。出会ったその日から、四年前のあの日から、私は貴方の傍にいと決めていたのだから。貴方が離れると言わない限り、私はこの場所を離れるつもりはない。けれど

「時間を、ください」

見上げる瞳に悲しさの翳が落ちた。12歳になったばかりの彼はまだ背が低く、今も私に視線を合わせようと必死で背伸びをしていた。その姿は 彼は不本意と言っただろうけど、とても可愛らしく抱きしめたい衝動に駆られた。

「何の？」

私は膝を折り、彼を見上げる姿勢を取った。

「私が貴方の傍に、貴方の隣にいて相応しい人間になれる時間を」  
「お前は、お前のままで良いんだ！俺はありのままのお前が……っ」  
「ありがとございます。でも、私がそうしたいのです」

これは私の我儘。彼の傍にいろなら、それに相応しい人間になりたい。自信を持って彼の傍らにいたい。だから

「お願い致します、レイヤード王太子殿下」

そう言つて、臣下の礼を取つた。

「……俺がお前の頼みは断れないつて、わかつて言つてるな」  
「はい、殿下」

それはもう、幼馴染ですから。  
顔を上げて微笑むと、レイが怒つたような、それでいて困つたような顔をした。

「……わかつた。但し」

絶対俺の元に帰つて来い。

そう約束して七年が経つた。そして今、私はその約束を果たすためにここにいる。

## 1：七年ぶりの再会

塵一つない廊下、綺麗に磨かれた窓、そこから見える庭は昔と全く変わってない。ここを歩くのも七年ぶりだ。あの頃は随分長い廊下だと思っていたが、今見ると案外短い。

「懐しいかい、この王城が？」

横を歩く騎士団長が訊いてきた。様々な死地をくぐり抜けてきたと言われるその人は、その噂に似合わずとても穏やかな顔をしている。身体のあるちこちにある傷跡や均整の取れた筋肉が彼を武人だと知らしめていたが、ゆつたりとした僧衣を纏えば神官と間違えられるだろう。

そんな彼に微笑まれると、思わずこちらも笑顔になった。

「はい、とても」

隠すこともないので素直な気持ちを打ち明けた。

何しろレイに会うのは久しぶりだ。魔術修行をしてきた七年間、幾度か実家には戻ったが、城には一度も上がっていない。

小さい頃からレイ達と遊び回り、第二の我が家とも言うべきこの王城。しかしレイとの約束 彼に相応しい人間になるというが果たせない内に、ここへ踏み入れてはいけない気がしていた。

でも今なら、胸を張って入って行ける。

重厚な扉の前で立ち止まった。忘れもしない。ここは王太子の執務室。七年間会いたかった人が向こうにいる。

団長の視線に私は頷いた。向こうも頷き返すと、厳肅な面もちで扉を叩く。

「殿下、アイザックです。新しい近衛を連れて参りました」  
「入れ」

どくん。

記憶にあるよりも幾分低くなった声。それでも私はその声に胸を高鳴らせる。

「失礼します」

団長について部屋に足を踏み入れる。山になった書類の向こうで、蜜色の髪が揺れ動くのが見えた。山の向こうでは仏頂面をしているに違いない。何年たっても執務嫌いは治らないようだ。

私の意図を悟ったのか、書記官のテーブルに座るもう一人の幼馴染が、呆れ気味の私を見て苦笑した。

「こちらが新しく殿下付きになった騎士です」

「そうか。廊下にも立たせておいてくれ。俺は今忙しくてな」

顔を見る気もないとは、よっぽど疲れているらしい。そういう所は本当に成長していない。

「レイ、顔を上げた方が良いと思うぞ」

主君の暴言を書記官のアルフレッドが窘める。これも昔から変わらない光景だ。が、しかし、諫言にそぐわないその不気味な笑みは、一体どういう意味なのだろうか。……知らない方が良い気もするけど。

アルは同意を求めるかのように団長を見た。団長もそれに頷き返し、にやりと笑う。二人ともどこか面白がっている風だ。

「おい」

「あ、はい」

団長の視線が移ってきたことで我に返る。あまりにも懐かしい光景で、ぼーっとしていた。王太子付きの騎士にはあるまじき事態。気をつけないと。

「挨拶しておけ」

私は黙って頷き、名誉挽回！と深々と頭を下げる。

「アークフォールド伯爵家長女、キャサリン・リディア・アークフォールドです。今日からレイヤード殿下の警護に当たらせていただきます」

書類の向こうで動きが止まった。

「キャサリン？」

がたと人が立ち上がる気配。それを感じて、私は顔を上げた。見開かれたエメラルドグリーンの瞳。七年前とは異なり、可愛いより格好いいと表するのが相応しくなった顔。陽だまりのような蜜色の髪がふわりと揺れる。別れた時は私より小さかったのに、今では完全に彼を見上げなくてはならない。

七年は大きかったなと、その立派になった姿を見て思った。まあ、中身はあまり変わっていないようだけれど。

「お久しぶりです、殿下」

「お前、キャス……？」

呆然とするレイに微笑みで答える。

「只今、戻って参りました。……殿下との、約束を果たすために」  
「な……に……？」

そんなに驚かなくても良いだろうに。約束を守らない人間だと思われていたのだろうか。もしそうなら、少し腹立たしい。

ここはきっぱりと私の真意を伝えておくべきだろう。

「殿下！」

びっくりと、レイの肩がはねる。

「不肖私、キャサリン・リディア・アークフォールド、殿下に永遠の忠誠を誓い、お傍で殿下をお守り続けることをここに宣言致します！」

「……………は？」

なんだろう、その間は。ここはレイに疑念を抱かせないよう、もつとはつきり私の忠誠心を示した方が良いのかもしれない。

「ですから、殿下は傍にいろって仰ったじゃないですか。確かに四六時中傍にいる警護は親しい人間の方が気楽ですよ。だから約束通り、お傍で殿下を守る力を身に付けてきました！剣術に自信がないわけではないのですけど、やっぱり女手だと剣だけじゃ心許ないですし！これからはずっと傍で殿下を守護しますからね！」

「お前何を……………、いや、待て。キャス、お前が七年間修行してきたのって…………？」

「魔術修行ですよ」



何を今更訊くのだろうか。それとも剣術の修行だと思っていたのかしら。確かに剣の腕も磨いたけれど、女騎士の剣術には限界がある。それぐらいの自覚はあった。

「……殿下？」

何がそうさせるのか、レイは両手で頭を抱えていた。一方、残りの二人は目を合わせてにやにやと笑っている。  
魔術修行はそんなにまずかったのだろうか。

「魔術修行じゃいけなかったのでしょうか？」

「……………いや、そうじゃない。……………ちよつと自分の馬鹿さ加減に後悔していた」

修行内容の問題ではないらしい。

しかし何かを納得していない様子で、そうだったよなーとかああいう奴だったよとか、ぶちぶち独り言を言っている。そう言えば、レイには時折一人の世界に入り込む癖があった。

別世界の住人となっているレイを、団長は躊躇いもなく現実へ引き摺り戻す。

「で、レイヤード殿下。彼女を近衛としてお認めいただけますか？」

「なっ……………！近衛だなんて認めるわけ……………」

「ちなみに、近衛として認められなかった場合、彼女は王国騎士団の一員として通常の業務にあたることとなりますので」

「待て、おいっ！」

「勿論、他の男とペアになって行動したりもしますよ」

「何だっつ！」

「泊まりがけだっつてしょっちゅう」

「とまっ……………」

「寄宿舍は流石に男女別ですけど、割と近いんですよ。そのせいか、女騎士の恋人って同僚がほとんどだそうで。まあ、近衛ならここに詰めっぱなしなんで、関係ないですがね」

なんなんだろうか、この会話。主君たるレイは苦虫を噛み潰したような顔で睨んでいるし、団長は相変わらずにやにや笑っているし、アルに至っては、耐えきれなくなったのか、部屋の隅で肩を揺らしている。声を殺してはいるが、あれは絶対爆笑している。話が自分についてのものであるが故に、アルの態度にはイライラする。一回殴ってやろうかと思ったら、レイが先手を打って蹴飛ばしていた。しかし、だ。この会話の主体は私であるはずなのに、その私が会話についていけないのはどういうことなのか。文句の一つでも言ううと思っただが、またしても機先を制された。

「どうします？ 殿下」

団長が立ち尽くすレイに問う。無言の背中に何を思ったのか、笑みを更に深くして言を継ぐ。

「近衛なら四六時中側におけますよ」

「……………許可、する」

なんだ、その葛藤は。約束を果たしに来たんだから、もつとすんなりと受け入れても良いだろうに。

しかしそんな恨み言も、振り向いた二つの緑玉に封じられた。真っ直ぐ向けられた双眸に、私の意識は絡め捕られる。

この人の傍にいられば、それで良い。

それだけのために、私は頑張って来たのだから。

私は彼の前に跪く。これが、私の決意、私の望み。

「殿下、これからよろしくお願い致します」

「ああ。よろしくな、キャス」

そう言っ て彼は微笑んだ。七年ぶりに見る、彼の笑顔だった。

## 2：変わらない場所

途中意味のわからない過程があったが、近衛就任が無事決定したので全てを水に流すことにした。決まったからにはレイを守ること  
に全力を尽くそう。そう決意を新たにする。

「おい、キヤス」

団長について退出しようとした所を呼び止められる。振り向けば  
怪訝な顔をしたレイがじっとこちらを見詰めていた。

「どこへ行く？」

「へ？」

「どこへ行く気だと訊いているんだ」

「外にいるつもりですが？」

王太子が執務室にいる時は、近衛は廊下で待機し来客を監視する  
のが倣いだった。なので、それに従おうとしたのだが

「廊下には行くな。ここにいろ」

「はあ？」

何を言い出すのだ。執務室に常駐する騎士なんて聞いたことがな  
い。

まだ譲位されていないとは言え、彼は将来国を背負う王太子であ  
る。当然彼の政務には国の中枢に関わるものが多く含まれており、  
国家機密レベルの情報があちこちに転がっている。この部屋を訪れ  
る人間も大臣クラスが殆どで、間蝶が飛びつきたくなる秘め事が交  
わされるのだ。

そんな空間に、忠誠を誓っているとは言え、一介の騎士を紛れ込ませるなんて非常識極まりない。

気持ち顔に出たのか、こちらを見詰め続けるレイの表情が曇る。ポーカーフェイスの訓練が必要なな。

「何を躊躇う？昔はここに入り浸ってたじゃないか」

「今思えば誉められた行動じゃなかったって思いますよ。それに、今と昔では状況が違います。あの頃はまだそんなにも国事に手を出していなかったでしょう」

貴方は成長してしまったから、政治の中枢となったここにはいない。

そう言外に告げたのだが、向こうも相当強情だった。

「約束を破る気が、キャス。俺の傍にいたと言ったんだろう。廊下じゃ傍とは言えないな」

わ、我が儘王子っ！中身成長してないのに、口だけは達者になってるっ！

しかしほんの少し前に自分から誓った言葉を覆せる訳もなく、暫くの葛藤の末、私は降伏した。

「……卑怯ですよ、殿下」

「どっちが。……まあ、それは帳消しってことにしてやるよ。それより、キャス」

「今度は何ですか、殿下？」

ここまで来たんだ。我が儘のもう一つや二つ、飲みましようとも。

「その“殿下”は止めてくれ」

何ですと？

「昔のように、“レイ”と呼んで欲しい」

「そんなことできるわけないでしょうっ！」

主を愛称で呼ぶ騎士が世界のどこにいるー！

「駄目か？」

「駄目です」

「どうしても？」

「はい」

「執務室（こくむしつ）にいる時だけでも？」

「……当然」

「俺とアルしかいなくても？」

「………」

「お前には、昔のことなんて過去のことなのか？昔のように慕っているのは俺だけか？」

だから、そんな悲しそうな目で見るんじゃない！

長年の習慣で、私はレイの泣き顔には勝てない。普段は我儘放題でこ憎たらしい子供だったが、泣きそうな顔を見ると何故か庇護欲が刺激されるのだった。よく悪戯やサボリ癖を叱ったりしていたが、結局はその顔に負けて尻すぼみになっていた。

「………そう言われると断れないの、わかってるわよね」

「ああ。幼馴染みだからな」

「………！」

意地悪そうな顔でにやりと笑う。さっきまでしていた悲しそうな

顔は何だったのか。変な能力だけは成長したようだ。どうせ育つならもう少し真面目な大人になって欲しかったなと、心の中で独り言ちる。

「でも、問題ないだろう？俺とおまえの仲だ。ちょっと俺に余分な肩書きが付いているがな」

「そうね。レイが王子だろうが何だろうが、レイはレイだもんね」

レイはちょっと驚いたような顔をしていたが、すぐに満面の笑みを浮かべた。裏に何も隠していない、純粹な微笑み。私も嬉しくなつて微笑み返す。

「私にとって、レイもアルも大切な幼馴染よ。二人とも弟みたいに大切に思ってるわ」

びきつ。

そんな音が確かに聞こえた。

「お、弟か……」

何故かレイの笑顔がひきつっている。今まで静観していたアルは再び笑い出し、レイの恨みがましい視線を浴びた。

二歳年下とは言え、大の大人に“弟”はまづかったのだろうか。でも彼らは妹と同じ年だし、事あるごとに面倒を見ていた私としては弟以外の何ものでもないのだが。

「……まあ、良い。五月蠅い爺どもがいる時はしょうがないが、普段は昔のままにしてくれ。そうでないと調子が狂う」

こいつもそうだしなと、アルを指差す。同意のつもりか、アルは

無言で微笑んだ。

「わかったわ、レイ」

そう貴方が望むなら。私は貴方の騎士だから。

それが言い訳であることには目を瞑ろう。昔のままという言葉にどれだけ安堵したかは、絶対に教えてやらない。

「では、昔のように発破をかけますか。こんなに書類を溜めるなんて、どれだけサボってたのよ！」

「しまった……。キヤスの説教癖忘れてた」

「貴方が言っただけでしょう。昔のように、って。ねえ、アル？」

「ああ、キヤスの言うとおりだ。諦めて仕事しろ、レイ。執務が滞ってるって大臣どもに文句をつけられるのは、大体僕なんだからな」  
「畜生！。味方がいないー」

執務室に笑い声が響く。この光景を見て、私は漸く帰って来たのだなと実感したのだった。



### 3：甘いワナ

居づらい。

どうにも居た堪れなくて、本日何度めかの溜息を吐いた。

「そんなに溜息を吐くな。辛気臭い」

どの口が言うか。

「レイ。私は近衛騎士なんだけど」

「ああ、ちよつと前に聞いたばかりだが」

「でね、普通勤務中の騎士は周囲を警戒したり、不審者の有無を探ったりするものよね」

「まあ、そうだろうな」

「まかり間違っても、ソファにゆったり腰かけてお茶を飲んでたりはしないと思うの」

「ふーん、そんなもんなのか」

「うん、そうよ」

「で、何か不満でもあるのか？」

「あるに決まってるでしょうが！」

勤務中の騎士がソファでお茶を飲みながら寛ぐ。そんなあり得ない状況に私はおかれていた。同僚が見たら嫌みの嵐、上司が見たら叱責間違いなしの光景である。

ただ言い訳をさせて欲しい。サボろうとか怠けようとか、私は決して考えていない。全ての元凶はこの男、レイヤード・イル・アリアス。ローディア王太子になるのだから。

話は今から一時間程前に遡る

「キヤス」

「何？」

「それ、どうにかならないか？」

「それって？」

「その体勢だよ」

扉の横にじっと立ち、来訪者を見張る。廊下の内と外という違いに目を瞑れば、至極真つ当な 場所が違ふ時点で真つ当とは言えない気もするが 近衛の務めであった。文句を付けられる謂れない。

「ならない」

「……そうか」

ものすごく不満そうな顔をしながら、レイは再び視線を書類に戻した。

書類を捲る音、ペンの動く音、王太子印が机に当たる音。一定のリズムが静かな部屋に響き渡る。

しかしそのリズムもすぐに止まり、再びレイがこちらを見上げる。

「なあ、キヤス。立っていると疲れるだろう。そのソファに座らないか」

「結構です。慣れてるし」

馬鹿を言っんじゃない。

「正直、そこに立っていられると、ずっと見られているようで落ち着かない」

「しかも見ているの、キヤスだしな」

意味のわからない茶々を入れたアルに、王太子印が飛んだ。こら、貴重な国璽を粗末にするな。

「レイ、ちゃんと仕事しなさいって言ったよね」

仏の顔も三度までよ、とにこやかに告げると、レイは不承不承書類に目を戻す。まだ納得していないようなので、私は安心させようと口を開いた。

「安心して頂戴。私はレイなんか見ていないから」

かたんという乾いた音がする。それはレイの手からペンが滑り落ちる音であった。

「見て……ない………？」

「うん。だから、気にしなくて良いよ」

「……………いや、それは……………」

彼の希望通りの対応をしたはずなのに、何故頭を抱えられるのだろうか。そういえば先程も頭を抱えていたし、慢性的な頭痛持ちなのかもしれない。肩凝りが酷いと頭痛が起きるとも聞くし。そうでなくとも、日々命を狙われる王子家業だ。頭痛の種は尽きないのだろう。

私は彼を少しでも安心させようと、万全な警備体制について説明することにした。

「そんなに頭を抱えないでよ、レイ。パツと見、護衛が一人で心許ないかもしれないけど、ちゃんと対策はしてあるから！」

「は？」

「それでも私、二級魔術師だからねー。ちゃんとこの執務室<sup>へや</sup>には対魔術結界が張ってあるのよ。しかも私オリジナルの術式だからそう簡単に解けないし、物理的な侵入のアラーム機能も付いてるから不審者対策もばっちり。ここに待機してる間は<sup>み</sup>ずつとそれを視てるから、レイを傷つけるような輩は絶対入れさせないわ！」

「いや、俺はそんなことを心配なんて……、視てる？……もしかして、俺を見てないって言うのは……」

「結界の方に意識が向いてるってことだけど？」

まあ、物理的に見えてないわけではないので、何か動きがあれば気づきますけど。結界を潜り抜ける人間がゼロとは言い切れないのに、室内の警戒をから空き状態にするほど、馬鹿ではないですけど。今度は酷く脱力した風に机に突っ伏された。無理に働かせ過ぎたか。

「あー。やっぱり調子狂うわー」

「あ、やっぱり急に仕事が増えるのはきつい？」

「？……ああ、そういうことじゃない。あんな、キヤス。お前は俺をサポートしたいに言うけどな、これでもずつと政務をこなしてきた人間なんだぜ。これくらい慣れてる」

言われてみれば。修行に隣国まで行っていた時でも、レイの働きのおかげは耳に入ってきていた。親を亡くした子達のために孤児院を増設したり、災害地に自ら赴いてその復興を全力でサポートしたり、病に倒れた国王に代わって各国と交渉し成功を収めたり。即位したら賢王と名を馳せること間違いなしと、周りの人が噂するのを誇らしく思っ<sup>て</sup>聞いていた覚えがある。

では何故

しかし私の疑問が形になる前に、レイが口を開いた。

「キヤス、ソファに座れ。結界を視ているなら立っている必要はないだろう?」

「えー。私にも体面つてものがあるし……」

「王太子命令だ」

「なっ!酷いつ!権力濫用!横暴ー!」

「黙って座つてろ!仕事の邪魔だ!」

私の文句にレイが耳を貸す訳がなく、それに戯れとは言え“王太子命令”は騎士にとって絶対で、私は不承不承レイの目の前におかれたソファに座る。

するとタイミングを見計らったかのように、香り高い紅茶が供された。驚いて顔を上げると、全てを見透かしたような笑みを浮かべてアルが立っていた。そして、その手には

「これ、リリイさんの所のシフォンケーキ」

びくうつ。

リリイさんとは、レイ達とお忍びで街に行った時愛用した喫茶店の女主人である。リリイさんの淹れるカフェオレが大好きで、セツトの飲み物はいつもカフェオレだった。そして、カフェオレ以上に絶品だったのが、このシフォンケーキである。

甘過ぎず、だからと言って味が薄いわけでもない絶妙なバランス。口に入れた途端、ふわっと素材の旨みが広がるあのスポンジ。シフォンの味を何倍にも高めるブルーベリージャム。販<sup>けな</sup>すところは何もない、完成されたお菓子。それがリリイさんのシフォンケーキなのである。

「キヤス、好きだったよね」

首が千切れんばかりに頷く。修業中に何度も夢に出てきたぐらい、大好物ですとも！

「食べる？」

食べて良いのなら、喜んで！

「なら、座ってゆっくりと」

ありがとうございます！

シフォンケーキの魔力に憑かれた私が、正気を取り戻すまで数十分の時間を要したのは、不可抗力だと信じて疑わない。

「大体、お前が勝手に一人ティータイムに入っただろうが」

「あれは罠よ！不可抗力よ！リリイさんの所のシフォンケーキ、美味しいんだもん」

目の前にあるのに食べないなんて罰が当たる！それぐらいリリイさんのシフォンケーキは美味しいのだ。

「それに結界張ってるなら、立ってようが座ってようが同じだろうが。外回りの騎士は別にいるんだし」

それはその通りだけれど、それはそれ、これはこれ。私にも体面ってものがある。

抗議の意味を籠め、私はそっぽを向いた。

「相変わらず頑固だねえ、キャス。……もつと視野を広くしないと、大事なことを見落とすよ」

アルのいつもの軽口か。

そう思ったのに、何故かその言葉が心のどこかに引っかった。しかし、そんなことはおくびにも出さない。

「ご忠告どうも」

全然聞いてないと苦笑される。真面目に言ってるになあとぼやくが、その声はどこか楽しんでる風で、いつものアルだとほっとした。

「まあ、いいや。つまりキャスは、ソファに座っている“正当な理由”があれば良いんだね」

「う……、そういうことに……なるのかしら？」

アルは首を横に動かし、私からレイへと視線を移す。

「で、レイは自分の視界にキャスがいてくれれば良いと」

「なっ！そういう意味じゃなくて、単に落ち着かないというか、その……」

「反論は不要」

「ぐっ……」

その時、私は悟った。自分がとんでもない失言をしたことに。

何故ならアルは、最上級の、そして長い付き合いの人間にしかわからない最凶の笑みを浮かべていたのだから。

「それじゃあ、簡単だね」

蛇に睨まれた蛙ってこんな気分なんだろうかと、現実逃避した自分を誰が責められるだろうか。



### 3：甘いワナ（後書き）

なかなか話が進みません……。。

#### 4：騎士のお仕事？

「では、これよろしく」

そう言つて、アルは自分の机にあつた書類の山の一部を私の前に積み上げた。

「緊急と思われる案件とそうでないものに分けてくれるだけで良いから。できれば案件の可否も見分けて欲しいけど、流石にそこまでは大変だと思うし」

これから覚えていつてねと、人懐っこい笑みを浮かべてお願いされた。

「「ちよつと待てえええつ！」」

あまりにも急な爆弾発言を聞いて、私とレイは寸分違たがわず立ち上がり、抗議の悲鳴を上げた。

「何これ、明らかに国家業務じゃない！機密保持とか、問題ありまくりじゃないの！」

「何でキャスに負担かけるんだ。これはどう見ても俺のサポート、つまりお前の仕事だろうが！」

「ちよつと、二人とも。一気に話すなよ。僕の口は一つしかないんだから、一度に言われても答えきれない」

突然のことに混乱する私達に対し、その混乱を引き起こした張本人は全て理解しているといった風に笑顔を向けた。そして、一旦席に着くよう促す。二人とも立っていることに意味は見出せなかった

ので、大人しくアルの勧めに従うことにした。

「じゃあ、問題点を整理しようか。まずはキヤス。一介の騎士が国家の中枢に入ることを気にしているんだよね」

間違っではないので一応頷いておく。しかしその前に、騎士の本分とか事務方である文官はどうなるのかとか、色々つつこみたいことがあった。

「で、レイはキヤスを信用できないから書類は預けたくない」と

「んなつ！キヤスを信用してない訳があるか！」

「じゃあ、キヤスには仕事を任せるほどの能力がないと」

「おい。キヤスを侮辱するのは、たとえお前であっても許さないぞ」  
「なら、何の問題があるんだ？」

「！だから……、その……」

いや、あるだろう……と、心の中でつつこむ。私の能力という個人的なレベルの話ではなく、近衛騎士の扱いとしての問題だ。

しかし、レイはそんなことを考えもしないのか、反論するきつかけを必死に探しているようだった。眉間に皺を寄せ、いやとかそのだとか、全く意味をなさない言葉だけ呟いている。

「レイ。気持ちには理解できなくもないが、過保護も度が過ぎると毒にしかないぞ」

溜息混じりでアルが指摘すれば、レイの眉間に酔った皺がより一層深くなる。アルの苦言を自覚しているのか、苦々しそうな表情で彼を睨んでいた。一方睨まれている方は、半ば苦笑しながら言葉を継いだ。

「ま、一生日の当たらないところに置いておくなら別だけどね」

そうじゃないんだろとアルが言う。そう言われて返す言葉もないのか、レイは黙って俯いた。<sup>うつむ</sup>

そんな二人のやり取りを、私はぼーっと眺めていた。自分が当事者である気はするのだが、いかんせん会話についていけない。何か重要な事が抜け落ちている、そんな気がする。しかし、その重要なことが何なのか。私には全くわからなかった。

わからない私は考えた。考えて出した結論は、一人静かにお茶を飲むことだった。

大分冷えてしまっていたが、高級な茶葉を使っているのか、十分美味しい。無駄にしたら大の紅茶党である師匠に叱られる。あの人がいたら、国境とか常識とかそういうものの全て無視して飛んで来そうで恐い。師匠の元にいたのは七年だが、あの人の破天荒っぷりを知るには十分な年数だった。

とは言え、師匠に感謝しているし、尊敬すべき師だと思っている。今も張り続けているこの結界も、師匠の指導があつてこそそのものだ。単なる騎士では近衛にはなれなかっただろう。

ありがとう師匠、紅茶好きで。現実逃避できてます。七年は案外長かったです。弟分二人が自分の知らない世界で生きてます。

「ねえ、キャス」

「ふえ？」

意識を現実に戻すと、エメラルドとサファイアの二つの双眸がこちらを見詰めていた。アルは今まで浮かべていた笑みを引っ込め、真剣な面持ちで口を開く。

「僕は君を信頼している。能力も忠誠心も全部含めてね。豪華な椅子にふんぞり返って座っているだけの大臣達<sup>たぬきジンイ</sup>よりも、よっぽど君の

方が優秀だ」

どういう流れでこういう話になったのかわからないが、一応感謝の言葉を述べておく。しかし、アルに褒められると薄ら寒く感じるのは何故だろうか。

「だから、キャスには騎士という枠を超えてレイをサポートして欲しい。これがキャスに仕事を追加でお願いする理由。今のレイには一人でも多くの信頼できる人間が必要なんだ。これは王太子付きの書記官としてではなく、レイの友人としての考え」

でもね、と口調を一転、優しいものに変えて話を続ける。

「僕はレイの友人でもあるけど、キャスの友でもあるんだ。で、友人という立場から言わせてもらうと、正直、近衛騎士なんて辞めてしまえっと思う。こいつの傍にいれば、国政を手伝おうが手伝うまいが、否が応でも色んなことが見えてくる。綺麗なことだけじゃなく、どす黒くて吐き気を催すようなこともね。下手するとキャスも巻き込まれて、傷付いてしまうかもしれない。それでも、君は傍にいたいと言える？」

なんだ、そんなことか。いつものらりくらりと物事をかわすアルだから、もつと重大なことがあるのかと思った。そんなこと、悩む必要すらない。

「勿論」

そう言って、私は笑う。

決意なら、七年前にできている。

「流石。男前な所も変わってないね。      これでも躊躇うのか、レイ。お前は、彼女を疑うのか？」

レイは少し不貞腐れたように頭を振って、視線をアルから私へと移した。

「疑ってなんかいない、……キャス」

「はい」

「ずっと俺の傍にいろよ」

何を今更。

何度目かと笑い飛ばそうかと思ったが、こちらを見るレイの顔があまりにも真剣で、私は笑うことができなかった。ただ素直に自分の気持ちを吐露する。

「勿論。レイがそう望む限り、ずっと傍にいるわよ」

「……俺は、絶対にお前を手放さない」

緑玉の瞳が私を射抜く。強い、確固たる意志を持った瞳。

「絶対に」

「それなら、私も絶対に離れない。一生、レイの傍にいます」

「本当か？その言葉に嘘はないか？」

「ありません。一生、レイの近衛として仕えさせていただきます！」

政事まで深く踏み込むことにしたんだ。これぐらいの覚悟があると伝えておいた方が良さだろう。そう思って、私は熱弁を奮った。

「安心して頂戴よー。父上にも、お前に見合い話は来ないって見離されたし。無理してまで結婚なんてしたくないもの。絶対嫁には行

きません！一生騎士として生きていきます！……レイ？」

ふと見遣れば、先ほどまでの態度はどこいったのかと訊きたくなるほど脱力したレイと、何故かまたも抱腹絶倒しているアルがいて、私はまたもや一人で首を傾げるのだった。

## 5：爆弾投下

王太子付き近衛、兼非公式書記官として勤め始めてから二週間後。週一回の全体訓練から執務室に戻る途中、私は馴染みのある声に呼び止められた。声の主を探して辺りを見回せば、後ろから一人の青年が駆けてくる所だった。

モスグリーンの礼服に身を包んだ彼は、私より若干明るい栗色の髪を風になびかせて小走りやって来た。久しぶりの再会に、私の頬が緩むのを感じる。

「兄さん！」

「キヤス！やつと会えた！」

兄、スコット・リディアークフォールドは、私を見詰めてにっこり笑った。私もつられて微笑み返す。

やっとなんというの少し大袈裟だなと思った。自分は囚人でも何でもないのだから、訪ねればいつだって面会できる。しかし満面の笑みを浮かべる兄にそんなことを言うのは少し酷な気がした。

「お前、どこ行ってたんだ？騎士団の宿舎に行っても、お前はここにはいないって言われるし。……お前、本当に近衛騎士になったんだよね？」

「失礼な！騎士じゃないなら、今のこの格好はなんなのよー」

今の私は、シャツの上に詰襟の上着を重ね、濃紺のラインが入ったズボンとダークブラウンのブーツを履いた、標準的な騎士スタイルをしている。制服の色がライトブルーなのは、王太子付きである騎士団二番隊である印だ。外回りの時はこの上にライトアーマーを装着するのだが、今は内勤なので腰に剣を差しているだけである。



「冗談、冗談。似合ってるよ、キヤス」

身内とは言え、褒められて悪い気はしない。にへっと笑うと、可愛いなーと言いながら兄は頭をわしわし撫でてくる。兄に撫でられるのは大好きなので、されるがままにする。

「あ、そうだ。兄さんは王城に何の用だったの？」

「ん？ちよっと、殿下に用事があつてね」

「じゃあ、一緒に行く？」

当然、と答えるように、私の頭をぼんと叩く。そしてどちらともなく、執務室へと歩き始めた。

「ところで、お前の部屋ってどこにあるんだ？てつきり宿舎にあるんだと思ってたが……」

「ああ、それ。今私はね、王太子宮に住んでいるのよ」

「……………は？」

執務室まであと数メートルといったところで、隣を歩いていた兄が突然立ち止った。目を見開き口をポカンと開け、何か信じられないことを聞いたと全身で表していた。

やっぱり突然の引越しはびっくりするのかと、兄を驚かせたことに懺悔の念を抱く。

「本当は宿舎に行くつもりだったんだけど、私近衛になっちゃったじゃない。いるのが殆ど執務室だから、騎士団の宿舎だと不便なのよねー。王太子宮と宿舎って、執務室がある場所を挟んで反対側でしょ。毎日毎日、宿舎から王太子宮まで行ってその後執務室にというのは面倒だし。」

そうしたら、殿下が王太子宮に来ないかって言ってくれて。私、女でしょ。王太子宮にいても問題ないし、警備もできて一石二鳥だから、今は女官達と一緒に住まわせてもらってるの。連絡しなかったのは悪かったけど、ちゃんとした所にいるから安心して頂戴」

流石に王太子宮。女官の部屋と言えど、騎士団の宿舎とは比べ物にならない広さで、罪悪感を覚えつつも結構気に入ってたりする。浴室なども付いているので、ちゃんとしたところか贅沢なことこの上ない。

しかしその待遇が不満なのか、話を聞いた兄はすごいしかめっ面をしていた。併設されたお風呂の素晴らしさとスプリングのきいたベッドの柔らかさを必死で説いたが、それはより一層兄の機嫌を損ねるだけだった。

「あんの、馬鹿王子……」

「に、兄さん？」

全身から不機嫌オーラを漂わせる兄に少し及び腰になりながらも、その意図を探ろうと試みた。私の視線に気づいたのか、兄はこちらに向き直ると満面の笑みを浮かべる。

正直に言おう。 恐い。

完全に目が据わっているし。なんだか背後に黒い炎が見えるし。周囲の温度もぐんぐん下がって来てるし！

「キヤス、これから王太子殿下と大切な話があるから、暫く離れてもらえるかな？」

「えっと……、警護は……？」

「団長がいるんだから、大丈夫だろう。大した時間じゃないから、ちよっとそこで待ってて？」

「で、でも……」

「待っていないさい」

「はい！」

穏やかな口調に反して立ち上る怒気に、私は最敬礼をして送り出すのだった。小さい頃からの教訓である。

触らぬ兄に祟りなし。

## 5：爆弾投下（後書き）

天然妹にはシスコンな腹黒兄が王道だと思います（笑）  
ちなみに兄上は既婚者です。夫婦揃ってキヤスが大好き。

## 閑話1：執務室での密談

「失礼します」

そう言って入室してきた男は、傍に控える人間には目もくれず、部屋の主へと歩み寄った。気味が悪いほどにこやかな顔を湛えたまま、主の目の前ではんっと思い切り机を叩く。振動で数枚の書類が舞い落ちるが、それを気に留める者はこの部屋にはいなかった。ただ、張りつめた空気がこの部屋を支配する。

一触即発といった状況に、騎士団長であるアイザックは思わず腰を浮かす。しかし、彼の主はそれを目線で制した。

「流石、殿下。<sup>さすが</sup>随分と落ち着いておられる」

「そう見えるか？まあ、お前が取って付けたような理由で面会申請出してきた時点で、穏やかな話にはならないとは思っていたけどな」

ここまで怒り狂ってくるとは思ってもいなかったが、という部分は心の中で付け足しておく。

「ここに来る途中でキャスに会いましてね」

まるで心中を読まれたかのような発言に、レイヤードはちつと舌打ちをする。彼がキャスと会わないよう面会時間を設定したというのに。邪魔をしても会ってしまうほど、この兄妹の絆は強いのかと自分の思惑が外れたこととはまた違う苦々しい感情が彼の胸に渦巻いた。

「一体、何を考えてるんですか？」

「何の話だ」

レイヤードが空惚そりとはけると、スコットはすつと真顔に戻り、自国の王太子をぎろりと睨めつけた。

「キャスの王太子宮入りです。貴方はキャスを妾にする気ですか？」  
がんつ。

今度はレイヤードが力の限り机を叩く。彼らを取り巻く空気が一層険悪なものになり、今まで静観していたアルフレッドとアイザックは冷や冷やししながらその行方を見守る。

この状況はかなりまずかった。いくらスコットがレイヤードと長い付き合いで、さらに、王太子の懐刀とも言える人間であるとは言え、今までの行いは王太子に向けて許される類のものではなかった。もしレイヤードが彼を不敬罪に問うた時、彼らはその罪を認めざるを得ない。しかし、王城内の情勢が不安定な今、スコットという味方を失うことは避けたかった。

「スコット・リディア・アークフォールド子爵。その侮辱は聞き捨てならないな」

冷やかな口調がレイヤードの怒りを如実に表していた。二人はその声の冷たさに凍りつく。しかし、スコットの怒りも相当なものなのか、彼は全く怯む様子もなく、むしろ侮蔑の色を一層露わにする。

「侮辱？はっ。何が侮辱ですか。事実でしょう？婚約もしていない女性を自分の宮殿に引き入れるなんて。正式な妃にはしない、それだけの者だと言っているようなものだ！」

「違う！そんなつもりは断じてない！」

「殿下の意図が違うものでも、周囲の人間はそう思うんですよ。た

だでさえ、入隊直後の近衛拔擢には異論を唱える者が多いのに」

「キヤスは立派な魔法剣士だ。下手な剣士より何倍も強い」

「そんなこと、言われなくても知ってますよ。うちの妹は優秀ですから」

「なら」

「でもね、殿下。他の人間はそんなこと知らないんですよ」

「！」

「王太子が入隊すぐの女騎士を近衛に据え、しかも自分の宮に住まわせた。こういうことになるか、頭の良い貴方ならわからないわけではないでしょう？何故こんなことしたんです？」

レイヤードの冷めた部分が、スコットの言葉に同意する。

自分は愚かだ。自分の取った方法は単なるエゴでしかない。自分の身勝手がキヤスをより一層難しい立場へと追いやっていると、心のどこかで自覚していた。しかし

「……守りたかったんだ」

「は？何を馬鹿な事を」

「わかってるさ！愚かな真似だとな！だけどな、考えてみる。今、キヤスを宿舎に入れたらどうなるか。二番隊の奴らはわかってくれるだろう。訓練で実力を見ているからな。だが、他の隊の奴らは違う。そんな人間が彼女にどんな言葉をぶつけるかと思うと。耐えられなかった。俺の我儘で彼女が傷つくなんて」

「それも、我儘でしょう」

「……わかってる」

はーっと大きく吐かれた溜息で緊張が一気に緩む。スコットを包んでいた怒りのオーラは最早消え、憐れむような眼差しがレイヤードを向けられていた。スコットはもう一度溜息を吐くと、心底呆れた口調で語りかける。

「馬鹿ですね、殿下」

「ぐっ」

「まったく……。政では向かう所敵なしの貴方が、色事になるとこ  
うも弱いとは」

「五月蠅い……」

「まあ、そんなだから落ち着いていられるんですけど……。あ、言  
っておきますけど、殿下。妹に手を出したら承知しませんから」

「何を今更……」

「ははっ。そう言えばそうですね」

天使の如く純粋な笑顔を浮かべながら、悪魔も真っ青になりそう  
な殺気を発する。狂愛、とも呼ぶべきその感情に、レイヤードは眼  
前の男と自分がどこか似ていることを認めざるを得なかった。彼女  
には人を狂わせる何かが備わっているのかもしれない。

「で。どうする気なんです。中途半端な状態をこのまま続けるなら、  
本気であの子をもらって帰りますよ」

スコットの本気を感じ、レイヤードは慌てる。

スコットが一度何かを決意した場合、それを撤回させるのは非常  
に難しい。唯一無二の王命ですら覆し、自分の意志を貫く。それが  
この男、スコット・リディア・アークフォールドだ。味方につけれ  
ば頼もしいことこの上ないが、敵に回すとこれ以上厄介な人間はい  
ない。

レイヤードは心中で盛大に舌打ちをした。答えを欲するペリドッ  
トの双眸が痛い。

「久々に御前試合を開いてはどうです？」



レイヤードに助け船を出してきたのは、今まで沈黙を守ってきたアルフレッドだった。

「御前試合？」

「ええ。キヤスの實力を知らしめるにはうってつけでしょう？それとも、キヤスのレベルじゃ負けますか、団長？」

「いや、魔術が使えるなら優勝も狙えるでしょう。少なくとも二番隊では最強だろうね」

「ですって。警備上の面から提案するのを止めていたんですけど、このままだとレイの評判も落ちてきますし。少しぐらいリスクをしようっても良いかなと」

確かに城内の情勢が不安定な中、御前試合でレイヤードの姿を晒すのは危険性が高い。しかし一方で、この状況を放置すれば臣下の心が彼から離れていくことは必至である。二つを天秤にかけた時どちらにメリットがあるかは、言わずもがなである。

「流石、我が義弟。<sup>メリアナ</sup>妻に似て賢いね。……で、馬鹿王子」

「義兄上……、さり気なく惚気ないでください……」

「馬鹿は余計だ」

隙あらば惚気るスコットに、三人は小さくため息を吐いた。万年新婚気分でいるのなら、そろそろキヤス<sup>シスコ</sup>好きも卒業してもらいたいものだ。

しかしスコットは三人の思惑をしっかりと無視し、レイヤードにその意志を問う。

「やる気はありますか？」

「彼女のためなら」

ふっと、スコットが苦笑を漏らす。

「そういう所は思い切りが良いのに」

無然とした面持ちで目を逸らす姿を見て、スコットは尚も笑う。

「拗ねないでください。そんなだから、まだ僕に子供扱いされるんですよ。……はい、これ」

袖口から取り出した紙切れをすつと机に滑らせる。レイヤードはひったくるように受取り、内容を確認めた。

「はつきりとは掴めてませんが、向こうも水面下で動いているようです。もしかしたら御前試合には何か仕掛けてくるかもしれせん」

「わかった。注意する」

「くれぐれもキャスに怪我させないでくださいね」

そう言い置いて、スコットは立ち去った。入れ替わりでキャサリンが入室するかと思いきや、なかなか扉は開かれない。

気になって廊下の方へ意識を向ければ、何か二人で話している気配がする。別に隠し事をしているわけではなさそうだが、執務室の造りが頑丈なせいか、はつきりと会話は聞き取れなかった。

「兄さん、大好きー！」

何が起こったのか、突如興奮したキャサリンの声が分厚い扉を突き抜けた。全幅の信頼と親愛の情が乗せられたその言葉に、レイヤードは歯噛みする。

「スコットになりたい……」

（（それはないだろ！））

ちょっと危ない独り言に家臣二人がドン引きするのには気付かず、  
レイヤードは思い人の実兄に嫉妬して切ない溜息を漏らすのだった。

## 6：知らぬは自分ばかりなり

某月某日。晴れ。

兄がレイと面会しました。

すると、私が御前試合に出ることになっていました。

何故ーっ！

「そんなこと聞いてません！」

「それはそうだろう。今決めたんだから」

どこの暴君だ！

「団長も何か言ってください！新参騎士が御前試合出るなんてありえません！普通隊長とか、もっと研鑽を積んだ方が出られるものでしょう！」

「それは、まあ、そうだが」

「だったら」

「しかし、その隊長を入隊初日に叩きのめしたのは、……誰だったかな？」

「「は？」」

黒歴史として塗り潰したい過去を持ち出され、私は恥ずかしさと気まずさで失神しそうになった。

「隊長を、」

「叩きのめした？」

予定調和のような完璧さで、二人は私に尋ねてきた。似てない双子かと疑いたくなるほど、同じ表情でこちらを見詰めてくる。

生まれたからの付き合いなせいか、レイとアルはとても気が合う。勿論性格や嗜好は大分異なっているが、ある時は二卵性双生児と言っても過言ではないほどのシンクロっぷりを見せる。だからこそ、鋼よりも固い結束があるのだが。

正直言つて、こんな時にその成果を発揮しないでもらいたい。

「そんなことありましたっけ……？」

黙つててください。

眼差しに思いを乗せて嘆願するが、団長は意に介することなく肯定してくる。

「おや、忘れたのかい？ あれは強烈だったけどなー」

だから、黙つてー！

泣きそうな顔で団長を再度見詰めるも、人を食った笑顔で切り捨てられる。確信した。この人、わざとやってる。

「『女の分際で近衛などできるか！』という罵倒に平手で返事をするなんて、今時の貴族じゃ君ぐらいだろうね。しかもそのあと直ぐに試合を申し込むなんて、これ以上ないくらい男前だったよ。気づいていないのかい？ あの堂々とした態度と隊長すら敵わない技量で、今や二番隊の者は皆、君の信奉者だよ」

知らなかった。いや、むしろ知りたくなかった。男前つて誰？ 信奉者つて何？ 私は単なる新人騎士ですよ。神様でも英雄でも、何でもないですよ。

「へえ……」

なんとなくレイの機嫌が悪くなった気がする。心なしか、声のトーンも下がったようで、レイの顔を直視するのが怖い。

やはり自分の守護隊が、自分の近衛とは言え、他人を崇めるようになるのは嬉しくないだろう。申し訳ない気持ちで一杯になるが、私も今初めて知ったことなので勘弁してもらいたい。

「しょうがないでしょー！兄さんに、“売られた喧嘩は即倍返し”って、教わったんだから！」

「そういう問題か？」

「義兄上らしい……」

「だから、突然求婚されたのも、私のせいじゃないんですー！」

「……………え？」

この時の私はパニックを起こしていた。だから、気付けなかったのだ。目を見開いて固まるアルも、しまったという表情で青褪める団長も、恐ろしいほど目が据わったレイも、私は全く見えていなかった。

「キヤス。求婚<sup>こゝろ</sup>って、誰に？」

「隊長に……。試合で叩きのめしたのに、終わった途端結婚してくれなんて、冗談酷いわよ。そこまで馬鹿にしなくても良いと思わない？そんなにも女近衛っておかし……、レイ？」

がちやりという、執務室<sup>このへや</sup>には相応しくない音で、私は思考の海から浮上した。反射的に腰の剣に手を伸ばすが、不穏な金属音は守護すべき人の手中にある剣から発せられたものだった。

「アイザック。二番隊の隊長は確かフィリップで間違いなかったよ

な」

口調は穏やかだったが、完全に据わった目がその心境を如実に表していた。数刻前に見た兄さんと同じ、怒りに燃えた瞳。そして、錯覚かもしれないが、黒い炎がその背後に立ち上っていた。

「で、殿下、落ち着いてください！」

「レイ！きつと冗談だよ、冗談！本気なわけないだろう」

「はっ。あの融通の利かない、堅物石頭のあいつが冗談？それこそ冗談だろう」

「いや、そうかもしれないけど。もう、どっちでもいいから！剣を置けー！」

レイを必死で押さえつける二人を、私はぽかんと見ていた。

何故急に剣が出てくる？近衛騎士と隊のトップの対決はまずかったのか？

それなら団長が止めているはずだし……。

「キヤス！逃避してしないで、レイを止めてくれ！原因は君なんだから！」

「ほえ？」

私が原因？

「……嗚呼！そういうこと！」

突然の私の叫びに、揉み合っていた三人は一斉に動きを止めた。まさかと驚く目、遠くに意識を飛ばそうとしている目、そして怯えと期待に満ちた目。三種三様の瞳がこちらを見返していた。

「レイも隊長と手合わせがしたかったのね!」

どさあっ。

「流石、キヤス……」

「やっぱりと言つべきか、当然と言つべきか。悩むな、これは」  
「わざとだろ……、絶対……」

床に崩れ落ちた三人は、私をじっと見て溜め息を溢した。どういう意味かはよくわからないけど、非常に不愉快です。

「剣を持ち出したってことは、誰かと手合わせする気だったんでしよう?何か間違ってる?」

「間違つてはいない、けどね」

「確かに、間違つてはいないな」

そう言つて顔を見合わせたアルと団長は、揃つてもう一つ溜め息を吐いた。

「キヤス」

「何よ?」

少しぶっきらぼうな物言いに、レイは少し戸惑つたようだった。主に向けて良い態度だとは思つていないけれど、こういう口調になつてしまったのは私の責任ではないと思う。絶対。

「……………お前は、俺とフィリップ、どっちを取る?」

「は?何を訊くかと思えば。そんなの、レイに決まつてるじゃない」  
「!ほ、本当か?」

「ええ、隊長と手合わせするなら、誰かに近衛の仕事任せないとい



けないじゃない。自分の都合で仕事を放り出すのって、私あんまり好きじゃないのよね」

「……そっちょよ」

「それに、約束したでしょう。ずっと傍にいるって」

あの時からずっと決めていた。私の居場所はレイの横だと。

「だから、他の人の所には行かないわ」

貴方の傍でずっと生きていく。永遠の忠誠を、貴方に捧ぐ。

「本当に男前だねえ」

「殿下、完全に負けてますよ」

「……ほっとけ」

顔を赤くして俯くレイを、揶揄するような笑みを浮かべた二人が見下ろしていた。

## 7：有言即実行

日も傾き始めた夕方。キッキンキンツと、硬い金属のぶつかり合う音が王城の中庭に響く。普段は静謐な雰囲気の中庭だが、その空気は二人の人間によって打ち砕かれ、今は闘技場のような活気を醸し出していた。

「キヤス！手加減はいらないぞ」

中庭を騒がす犯人の一人であるレイは、執務室では見たこともないほど活き活きとした顔で模造剣を振るっていた。本当に執務嫌いは治っていないらしい。

「わかってるっ！レイこそ、手抜きしたから負けたなんていわないでよ！」

「馬鹿にするな。そんなに落ちぶれちゃいない」

ギンツ。

喉を狙った私の一閃が受け止められ、逆にそのまま押し戻そうとしてくる。私はその力に逆らうことなく後ろに飛びずさると、剣を構え直して再びレイに対峙する。

女である自分は、どうしても体力面で男には負けてしまう。力技を続けていては必ず負けるのはこちらだ。だから、私は短期集中をモットーとしている。

睨み合うこと数秒。レイの僅かな隙を狙って大きく踏み込む。しかし、レイもそれは予測していたのか、軽々とその剣を弾き、その返しで斬りつけてくる。

体を捻ってその剣筋を躲かわした私は懷に潜り込もうと試みたが、今度はレイが大きく下がったためまた距離ができる。

今度はレイが先に動いた。剣を頭上高く振りかぶり、勢いよく飛び込んで来る。当然腹がから空きとなったので、私はそれを逃さず突っ込み

「　っ！」

どだんっ。

しまったと思った時にはもう遅く、私は既に地面に叩き付けられる。急いで身を起こしたが、眼前に突き付けられた剣が試合終了を教えていた。

「俺の勝ちだな」

「魔法使うなんて反そ……」

「御前試合の練習だと言っただろっ。御前試合では魔法の使用は禁じられていない」

「ぐっ」

「じゃあ、特製スイーツはなしってことで」

「うわああんっ！」

王城の料理長が作る、特製スイーツ。それがレイと私の練習試合における景品だった。

執務室の床に蹲ひざまづっていたレイは、起き上がるなり手合わせを申し込んできた。突然のことだったが、主の命令ならばどんな時でも従うのが騎士である。合同練習で疲れてはいたものの、レイの騎士である私はその希望を進んで受け入れた。　景品の特製スイーツに釣られた訳ではない。絶対。

「そんなにも悔しいなら明日またやるか。御前試合の訓練にもなるだろう？」

「……スイーツは？」

「付けてやろう」

「やりましょう。いやもう、是非とも」

……繰り返して言うておくが、私はスイーツに惹かれている訳ではない。立場上、王太子殿下の申し出を断りきれないだけである。

「アイザック、この剣暫く借りてて構わないか」

私達から少し離れた所で観戦していた団長は、にこりと微笑んで頷いた。ちなみに試合用の模造剣を用意してくれたのも団長である。

「そんなもの模造剣ならいくらでも。練習場に行けばたくさんありますしね。  
続けるんですか？」

「ああ、近衛のキヤスは鍛錬に時間が取れないからな。俺とやれば、警護も兼ねて一石二鳥だろう。それに俺の鍛錬にもなる」

「へーえ」

団長の不気味な笑顔に、レイは顔を顰めた。

「何が言いたい……」

「いえ、別に。では、邪魔者は退散いたしますね。御前試合の段取りも決めないといけませんし」

「な！邪魔じゃ」

「弁解は結構です。では。執務室に戻ったら、秘書官殿に日程は早めに決めていただけるようお願いしておいてください」

ひらひらと手を振って、団長は中庭を後にした。私達も、そろそろ執務室へやに戻らないと、残っている執務が終わらない。

「レイ。そろそろ、戻ら」

そう話しかけた瞬間。

「どうした、キャス？」

「誰が来ます」

私の結界が、誰かの姿を捕らえた。

此処は王城の中庭。王族と一部の許された者のみが入れる、プライベートスペースだ。昼間ならともかく、こんな日の傾きかけた時間に来るべき場所ではない。

私は持っていた模造剣を放り出し、代わりに愛剣を握った。視る限り一人のようだが、油断はできない。私はレイを背に隠し、闖入者が来るのを待った。

## 8：メルリック侯爵

「これは、これは。レイヤード王太子殿下」

うわ、趣味悪い。

これが、闖入者に対する私の第一印象だった。

不必要なまでに大きいダイヤのカフスに、女性でも着けなさそうな派手派手しいサファイアの指輪。服の色はダークグレーと地味ではあったが、いかんせん金系の刺繍だらけなのでお世辞にも上品とは言い難い。その上、坂道でつづけばそのまま転がりそうな肥満体型なので、悪徳役人の典型的サンプルを見ているようだった。

「メルリック侯爵。このような時間に何用か」

低く咎めるような声が、私の背後から響く。それは、今まで聞いたこともない声。聞く人の足を竦ませる、為政者の声。

しかし、その声も眼前の男には効果がないのか、侯爵と言われた男は下卑た笑みを浮かべた。

「御無礼をお許してください。アルティオス殿下を探しておりましてこちらにいらしたと人伝に聞いたのですが」

アルティオス殿下。

その名を聞いて、私はこの男の正体を思い出した。

アルティオス殿下は、現国王　つまりレイの父親　の異母弟であり、王位継承権第二位を持つ男性である。王弟と言っても、先代の晩年に生まれた彼はまだ三十代。レイと同じ蜜色の髪に、ビリジ안의瞳。更に童顔なのも相まって、殿下とレイ並ぶとまるで兄弟のように見える。

そのアルティオス殿下の母方の伯父が、このラザード・リエラメルリック侯爵だった。

「此処には大分いたが、叔父上は見かけなかったぞ」

「そうですか。見間違いだったのかもしれませんが」

そう言うてにやりと笑む姿は、王家に近い血筋の人間とはとても思えない。家柄によって人の貴賤は決まらないという、最たる悪例だろう。

「しかし、このような場所で女性と戯れておいでとは……。いやはや、有能な方は違いますなあ」

私は露骨な嫌味に顔を顰めた。侯爵の位を持つ者へ向けて良い表情ではなかったが、剣を抜かなかったただけまだマシだと思う。

しかし、レイはこんな状況にも慣れているのか、涼やかな顔で闖入者に応じた。

「日々の鍛錬も王族の務め。上に立つ者、学だけでなく武にも秀でておらねば民の心は掴めまい。侯爵殿も一緒に如何か？いざという時、自分の身は自分で守らねばなるまい」

「お戯れを。この老いぼれの命など……。買い被り過ぎですぞ」

「そんなに謙遜せずとも良いだろう。貴殿も、叔父上もまだ若いのだから。まだまだこれからであろう」

背後でレイが笑う。普段の無邪気な笑いではない。ひどく冷たい、乾いた笑み。

嗚呼、そうだ

「恐悦です、王太子殿下」

この人は、“王”になる人だ。

「もう日も大分傾いた。叔父上も自室にお戻りだろう。叔父上に用があるなら、そちらを探すと良い」

「は。ありがとうございます。では、私はこれで。殿下もお早めにお戻りなさいませ。年寄りの戯言たわごとかもしれませんが、暗くなると足元が危険ですぞ」

「そうかもしれぬな。貴殿も、十分に注意するが良い」

侯爵の姿が見えなくなると、レイは大きく息を吐いた。同時に張り詰めていた空気が解ほくれ、胸の内に押し込めていたのであるう怒気がレイの周囲にたちこめた。

「あの狸……！」

警戒すべき人間も消えたので、私は体をくるりと回転させ、レイへと向き直った。先程の己を殺した声とは違う、素直に自分の感情を露わにする姿を見て、私は思わず微笑んだ。

「何がおかしい？」

「いえ、別に」

ただ

「だったら笑うな！」

ただ……、何だろう。

「あら。そうやってむくれるなんて、子供っぽいわよ」



「！」

顔を赤く染めて極まり悪そうに私を見下ろしてくる彼は、数刻前の威厳に満ちた人物とは同一とは思えない。拗ねて膨れるのは七年前と全く変わっておらず、まだ小さかった昔の姿と重なった。

外面は良くなったけど、中はまだまだ成長しきれていないらしい。

「戻りましょう。まだ、書類しりいが残ってるわ」

「手合せで疲れたから、少し休んでも」

「アルに頼んで、書類の量を二倍にしてもらおうか」

昔も勉強をサボっていたレイをこんな風に叱ったつけ。そしていつも不満そうに私を睨むのだ。

「……戻ればいいんだろ」

「わかればよろしい」

放り出した模造剣を拾い、レイの手を取った。昔とは違う、しっかりとした手の感触に、どくりと心臓が音を立てる。

私よりも滑らかで見惚れるほど綺麗だった手は、ペンだこと剣だこでやや歪になり、色もやや黒っぽくなっていた。

「早く戻るわよ」

ちっと不服そうに舌打ちするが、彼が本気で嫌がっていないことはわかってる。

手を歪にするほどのペンだこと剣だこは、彼が頑張り続けていた証。王太子としての執務も身を守り抜くための鍛錬も、この七年間、彼は決して放り出していなかった。私が傍にいた時だってそう。不満を言いながらも必ずそれらを遣り遂げていた。

だから、私は。

「もう、膨れないの。私も手伝うから」

この人を、支えたいと思ったんだ。

## 8：メルリック侯爵（後書き）

終わりそうな雰囲気ですが、まだまだ続きます。  
登場人物も増えてきたので、一覧表でも作ろうかと思案中です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3620w/>

---

この思い、君に捧ぐ

2011年11月6日09時11分発行